

春夏秋冬、忘れようと努めました

下野邦子

長崎県・五八・自営業

会えなくなつて、十三年の月日が流れましたね。どうして別れたのか、今もはっきりした理由は分かりません。あなたは どうしているのか？ テラス越しの晩秋の山々の紅葉を見てみると、いつの日だったか、雲仙うんぜんの地獄の細道を歩いた光景が今頃の季節だった事を思い出してしまいました。何の目的もなく、空虚だった私の生活を変えてくれたのはあなたでした。二人でいると、つかの間の時間さえ貴重である事を教えてくれました。人を好きになる事が気持ちに張りを与え、人にもやさしくでき、仕事をする生き甲斐につながる事も教えてくれました。

季節が変わる度にどこへでも連れて行ってくれましたよね。何故か、秋の旅をとりわけ深く覚えています。秋が大好きで、秋生まれだからでしょうか。すすきの中を車で走りましたね。コスモスの花の中で写真を撮つて、囲りは女性だけなのに、ひとりだけ浮いていたあなた。そうそう、九州では珍しく雪が積もった日の朝、博多へ仕事で出かけるあなたについて車で行く途中、前へ進めず、チェーンを巻く為、外で作業をしている

あなたに傘をさしかけたら、寒いから中で待つてなさいと言って黙々とチェーンを巻いていました。みるみる黒いコートが白くなって、私は暖かい車の中でひとり姿も見えないあなたを気づかっていました。

一番なつかしい思い出は、初詣。毎年仕事の都合で、約束した時間に来れなくて着物の私は何時間でも待たされました。

別れてからの春はふわふわと過ごし、夏のざわめきは憎らしくて、大好きな秋はかぐや姫みたいに月を眺めて泣いて、冬は木枯らしの町を歩いてあなたを忘れようと努めました。

ただ、今は、だれよりも私を大切にしてくれたあなたとの時間を、甘く、なつかしくかみしめています。

あなたは白髪はくはつの六十四歳？

それとも髪の毛のさみしくなった六十四歳？

知るすべはないけれど、今は、今は、とても恋しいあなたです。